



Osaka Gakuin University Repository

Title	“Children on Their Birthdays” 研究－ Mr.C の語りたかったこと－ A Study of “Children on Their Birthdays”: What Mr.C Wanted to Narrate
Author(s)	山口 修 (Osamu Yamaguchi)
Citation	大阪学院大学 外国語論集 (OSAKA GAKUIN UNIVERSITY FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES), 第 64 号 : 1-22
Issue Date	2012.06.30
Resource Type	Article/ 論説
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

“Children on Their Birthdays” 研究
— Mr. C の語りたかったこと —

山 口 修

A Study of “Children on Their Birthdays”:
What Mr. C Wanted to Narrate

Osamu Yamaguchi

序

Truman Capote の短篇 “Children on Their Birthdays” (1949) は次のように始まる。

Yesterday afternoon the six-o'clock bus ran over Miss Bobbit. I'm not sure what there is to be said about it; after all, she was only ten years old, still I know no one of us in this town will forget her. (119)

語り手は、主人公 Miss Bobbit の死に対して、「結局、彼女は10歳に過ぎなかった」と事実を語るだけである。続けて、「誰も彼女のことを忘れることがないだろう」とあるように、Miss Bobbit は誰もが関心を抱かずにはいられないような存在であり、その彼女の死は大きな事件だったに違いない。にもかかわらず、なぜこの作品の語り手は Miss Bobbit について、彼女に起こった悲劇を強調することなく、事実だけを語ったのだろうか。

この語り手は、例えば、叙情性を漂わせた語りで様々な心情を吐露する *The Grass Harp* (1951) の Collin や、*Breakfast at Tiffany's* (1958) の語り手とは異なり、Helen S. Garson が指摘するように、物語の中で何らかの行動を起こす人物としては描かれていない (Garson 55)。また、全体を通してほとんど自分の感情を表すこともないのである。

これまでも拙論の中で議論してきたように、Capote の作品は彼の伝記的な背景と強く結びついている。本論では、Mr. C と呼ばれる Capote を連想させる語り手と、Capote、Capote の母親である Lillie Mae との関係を考慮しつつ、なぜ Mr. C が冒頭のように Miss Bobbit について語るに至ったのか、彼女の死の意味と同時にその理由を考えてみたい。

I

この小説の主人公 Miss Bobbit と、Capote、母親 Lillie Mae の三者間には多くの類似性が見られる。まず、それぞれの類似性について考察していきたい。

最初に、Miss Bobbit と Capote との共通点を見ていこう。Miss Bobbit に

ついて、語り手は次のように描写している。

A wiry little girl in a starched, lemon-colored party dress, she passed along with a grownup mince, one hand on her hip, the other supporting a spinsterish umbrella. . . . “Begging your pardon” called Miss Bobbit in a voice that at once silky and childlike, like a pretty piece of ribbon, and immaculately exact, like a movie-star or a school-marm. . . . As Aunt El said, whoever heard tell of a child wearing make-up? Tangee gave her lips an orange glow . . . she had a skinny dignity, she was a lady, and, what is more, she looked you in the eye with manlike directness. (119-120)

彼女は“wiry little girl”であり、住人の Mr. Henderson からは“midget”と呼ばれる。容姿は子どもであるにもかかわらず、化粧をし、威厳を持った“lady”である一方、“manlike directness”を持つという、子ども、大人、女性、男性といった要素が混在している様子が描かれることで、Miss Bobbit が異質な存在であることが強調されている。

Capote も同様に、彼の故郷 Alabama の田舎町では異質な存在であった。例えば、Marianne M. Moates は、“Truman was different. He'd *always* been different. . . . [H]e was *living* the bizarre life-style. In his family's eyes and in the eyes of many people in Monroeville, he acted like a kook. He *was* a kook” (Moates 16) と述べているが、幼少

期の彼については、多くの言説の中で“different”、“bizarre”、“strange”といった語で描写され、いかに彼が異質な存在であったかが強調されている。¹ Capoteの幼少期に隣に住んでいたHarper Leeも、小説*To Kill a Mockingbird* (1960)で、CapoteをモデルにしたDillという男の子を登場させ、“Dill was a curiosity” (7)と彼の風変わりな姿を描写しているほどである。²

Miss Bobbitによれば、彼女の父親は刑務所に入っており、母親は“My mother has a disorder of the tongue, so it is necessary that I speak for her” (120-121)という状態のやつれた女性で、母親の役割をほとんど果たしていない。

一方Capoteも、両親は夫婦仲が悪く、彼の幼少期、母親は彼を置き去りにして外出することがしょっちゅうあった。戻ってきても、すぐにまた彼をいとこたちに預けたまま出て行ってしまうという行動を繰り返した。いつも彼を放り出し出歩き回る母親に、仕事とってなかなか自分の所にやって来ない父親。Clarkeが、“It was that none of the Faulk sisters, even the beloved Sook, could take the place of his real parents” (24)と述べるように、預けられたFaulk家の中で一番大好きなSookでさえ、彼の親としての役割は果たせていない。そのような環境にCapoteは長い間置かれていた。家族が家族として機能していないという点でもMiss BobbitとCapoteは共通している。

Miss Bobbitの夢は、ダンスで有名になることであり、そのために学校へも行かず、毎日ダンスを練習し続け、ダンスのためであれば悪魔を愛することさえ厭わない。地元で開催された、優勝者はHollywoodでスクリーンコンテス

トを受けられるということを謳ったダンスコンテストでは、派手な演技で優勝する。しかし、そのコンテストの主催者は詐欺師であり、結局彼女は騙されてしまう。その結果、Miss Bobbit は New York への進出を決意するのだが、彼女のダンスにかかる思いは誰にも負けないものがある。

Capote も、*Music for Chameleons* (1980) の中で次のように述べている。

I started writing when I was eight. . . . When God hands you a gift, he also hands you a whip; and the whip is intended solely for self-flagellation. . . .

As certain young people practice the piano or the violin four and five hours a day, so I played with my papers and pens. Yet I never discussed my writing with anyone; if someone asked what I was up to all those hours, I told them I was doing my school homework. Actually, I never did any homework. My literary tasks kept me fully occupied. . . . (xi-xii)

作家になるために幼い頃から一人で一心不乱に毎日書き続けていたことがわかる。有名になることを夢見て、その決意を表す “Sand for the Hour Glass” (Clarke 69) という力強い詩を書いているが、夢の実現に向けて努力する姿も類似性を感じさせる。

また、Miss Bobbit は、語り手である Mr. C に次のような理想を語る。

I think always about somewhere else, somewhere else where everything is dancing, like people dancing in the streets, and everything is pretty, like children on their birthdays. (127)

これはJ. D. Salingerの*The Catcher in the Rye* (1951)の主人公 Holden が語るライ麦畑で遊ぶ子供たちの姿と重なる。純真無垢な子どもたちが遊んでいる場所は、けっして現実化されることのない永遠の夢のような場所であり、いわば、大人社会の持つ既成の価値観の侵入から守られた状態である innocence を保ち続けているような場所である。³ Capoteの多くの作品に共通してみられる、幸福な時間を過ごし続けられる場所を求める主人公の姿を Miss Bobbitにも見ることができる。

安住の場の探求はCapote自身が求める生き方でもあった。彼が同じような場所を求め続けていたことが、彼の伝記作家Gerald Clarkeの次の一節からわかる。

Even his voice began to sound strange, peculiarly babylike and artificial, as if he had unconsciously decided that that part of him, the only part he could stop from maturing, would remain fixed in boyhood forever, reminding him of happier and less confusing times. (Clarke 42)

さらに、彼の友人のPhoebe Pierceの“Our dream was to get out of Greenwich and to go to New York. . . . Manhattan was Oz to us, a

place where we could let loose and enjoy ourselves” (Clarke 57) という言葉が示すように、Miss Bobbit や、後に見るように母親と同じように Capote も New York に憧れを持っていた。

このように Capote と Miss Bobbit は、外見上似ているというだけでなく、夢を実現するために努力し、自分が幸福に過ごせる場を探求するという人生の目標を持つ点でも共通している。

II

次に、Capote の母親 Lillie Mae と Miss Bobbit の共通点を見ていこう。⁴ Miss Bobbit には母親 Lilly Mae が色濃く反映しており、本作品においてもそれを十分に読み取ることができる。

Lillie Mae がどのような女性であったのか、Clarke から引用してみよう。

Everyone conceded that she was a fine-looking young woman, perhaps the most fetching girl Monroe County had produced in a generation. What people objected to was the fact that she made no secret that she shared their high opinion. . . . Her eyes were fixed on distant horizons, on New Orleans, St. Louis, even New York City. (Clarke 5)

自分の美貌には過大な自信を持ち、頭も良く、後に New York で勤め先の店長を任されるほどのマネージメント力もあった。その美貌と能力で、都会での

成功を夢見、“her basic goal was what it had always been: home, security, and a place in society” (Clarke 28) とあるように、社会的地位を切望する女性であった。

Miss Bobbit も Garson が “unlike a real child, who dreams impossible dreams but does nothing to achieve them, Miss Bobbit employs all her considerable energy to make her dreams reality” (Bloom 89) と表すように、独力で自らの夢に向かって生きている。自分のダンスには絶対の自信を持ち、どうすれば観客を喜ばすことができるのかということさえよくわかっていた。先に述べたダンスコンテストへの出演も、自分の能力をみんなに知らしめ、New York 進出という大きな夢を叶えるためのものであった。Bobbit と Lillie Mae は New York で成功したいという点で似ていることがわかる。

III

New York での生活に憧れていた Lillie Mae は、Joseph Garcia Capote という新しいパートナーと再婚し、New York の上流社会への進出を果たす。Capote の作品を論じる上で母親との関係は重要な問題であるが、ここで New York での Lillie Mae と Capote の関係を見ておきたい。

Alabama での Capote は、つねに母親と一緒に生活を夢見続けてきた。母親の再婚を機に、念願叶って New York で母親と一緒に暮らせるようになるが、それは彼が Alabama で切望していたものとはだいぶ様子が異なるものだった。

When he was in Alabama, Truman had longed to be in the North with his mother. . . . [H]is busy mind had constructed a woman more of fiction than of fact. Much as he had done with Arch, he had turned Lillie Mae into a character out of one of his storybooks, someone who would transport him to a more romantic and exciting world, a place where he would be loved, protected, and ceaselessly admired.

Living with her in New York, he discovered that neither that world nor that woman existed in fact. . . . [T]he Lillie Mae who had smothered him with kisses in Alabama was stingy with her affection in New York. She had taken him with her, as he had prayed so many times, but the rest of the story was not following the plot he had imagined. His disappointment was complete, and he felt that she had betrayed him. . . . Lillie Mae had promised herself, and that, it seemed, was the one thing she would not give him. (Clarke 39-40)

幼児期よりずっと思い続けてきた母親と一緒に暮らしたいという Capote の願いは叶った。しかし、現実には母親の愛情は自分には向かなかった。なぜなら、Lillie Mae は New York で今まで以上に自分の生活を楽しむことにエネルギーを向けたからである。

All of Lillie Mae's ambitions had been realized. She was exactly

where she wanted to be, doing precisely what she wanted to do, in the company of the only man she wanted to do it with. Like a lovely plant that had been stunted by lack of light, she blossomed under the sunshine of a happy, prosperous marriage, and before the decade was over, she had transformed herself from an unsophisticated country girl into a woman of worldly tastes and glamorous occupations. (Clarke 40)

挙げ句の果てに、Capoteの母親は「田舎くさい」Lillie Maeという名前を「国際的な」Ninaと改名するに至る。Joe Capoteとの結婚でNinaは自分が望んだ生活を手に入れたが、Trumanは視野に入っていなかった。New Yorkでも、Capoteは母親という精神的安住の場を手に入れられなかったのである。

IV

次に、語り手 Mr. C について見ていこう。物語における語り手の役割について、Gerald Prince は次のように述べる。

どのような物語においても、語り手は、自分が報告している事象や、描写している作中人物や、提示している情緒や思考に対して、ある態度を採るものである。例えば、語り手が重きを置く事象もあればそうでない事象もあるし、語り手が腹藏なく判断する作中人物もあれば遠慮がちに判断する作中人物もあるし、語り手が、らしいということではなく、はっきりわ

かることだけを述べることもあれば、語り手がある結論への到達に個人的な責任を負うたり、それを拒否したりすることもあるということである。

(遠藤訳 50-51)

つまり、語り手は語るものに対して様々な戦略を採ることができる。とすれば、何が、どのように語られるか、あるいは語られないかを検討することで、語り手の態度を明らかにできるだろう。以下、語り手が語るものを具体的に見ていこう。

先に引用したようにこの物語は冒頭で結末が語られ、Miss Bobbit をめぐる物語が悲劇であることが最初から提示される。

We were sprawled on the front porch having tutti-frutti and devil cake when the bus stormed around Deadman’s Curve. It was the summer never rained; rusted dryness coated everything. . . .

(119)

“devil”、“Deadman’s Curve” という語がこの後の展開を暗示する。と同時に、“dryness” の持つ “lack of interest” という意味が、その数行後の “we were wishing that something would happen, something did” (119) と呼応し、Alabama の静かな町で Miss Bobbit が引き起こすであろう波紋を暗示する。

このように、冒頭で Miss Bobbit の死を提示している点には注目しておく必要があるだろう。なぜなら、時間軸に沿った語りではなく、あえて結末を先

に述べているところに、読者に彼女の死を意識させようとする語り手の意図が感じられるからだ。

次に物語は、Miss Bobbit に恋する二人の少年、Billy Bob と Preacher Star が中心になる。その語りは Garson が “humor of the tall tale” (Bloom 90) と呼ぶように、Mark Twain を思わせるような語り口である。その中で語り手の態度を理解する上で気になるエピソードがある。それは、Bob が Miss Bobbit にあげるために母親の Aunt El が品評会に出すために大切に育てていたバラを一本残さず切り取ってしまい、母親から小枝の鞭でお仕置きをされる場面である。こっぴどく叱られた Bob は裏庭の木の上に登り、二度と下りないと宣言する。父親や母親の再三の説得にもかかわらず、断固下りてこようとしない Bob に、Aunt El は優しい声で、“I’m sorry, son. . . . I didn’t mean whipping you so hard like that” (123) と語りかけるが、それでも拒否し続ける。とうとう最後には泣きながら、“I don’t hate you, son. . . . If I don’t love you I wouldn’t whip you” (124) と語りかける。この発言の後、語り手は以下のように続ける。

The pecan leaves began to rattle; Billy Bob slid slowly to the ground, and Aunt El, brushing her fingers through his hair, pulled him against her. Aw, Ma, he said, Aw Ma. (124)

語り手は事実を語るだけで、何の反応も見せていない。芝居がかった親子の愛情が繰り返されるため、読者には滑稽にすら感じられる。その結果、語り手がこの親子に対してかなり距離をおいた見方をしているように思われるのだ。な

ぜ、そのような態度を取るのか。後に見るように、そこには語り手が求めているものがあるからだ。距離感を持たせることで、逆に読者は語り手が語らなかつたことを強く意識させられるのである。

一方で、その直後に、恋煩いのBobに “I felt very sorry for him, especially because he looked so worried” (124) と語る場面や、Miss Bobbitを巡る諍いでBobと仲違いをするPreacherに “Oh, yes, Preacher, you looked so lost that day that for the first time I really liked you, so skinny and mean and lost going down the road by yourself” (129) と同情する場面には、語り手の素直な感情が示されているように感じられる。

では、なぜ語り手はこのように語り分けるのだろうか。Garsonは、

Capote gains maximum effect from humor, but the comedy, while very important to the story, is not the author's major concern. He always brings us back to the primary motif, the sweet and sad lost moments of childhood, days that can only be recaptured in idealized memory. (Bloom 90)

と述べている。またWilliam L. Nanceも、Miss Bobbitの中にCapote自身が反映されていると述べているが(Waldmeir 201)、どちらの場面でもCapoteが幼少期に抱いた感情が表されている。

しかし前者では、語り手が親子の愛情になんら感情を示さないことで、逆に語り手がそのことを強く意識していること、いわば羨望を感じていることが示されている。自分の感情を語らないことで、逆に、うまくいっていない

Capote 自身と母親との関係が暗示されているように思える。

一方、後者では、Garson のいう、Capote 自身の理想化された子ども時代の郷愁に基づく感情が明示されている。Ihab Hassan は Capote の小説を、「夜のスタイル」と「昼のスタイル」に分類している (Hassan 231) が、⁵ 彼が指摘する「昼のスタイル」の特徴である「ユーモア」、「饒舌」がここには示されており、この点では、他の「昼のスタイル」の小説に見られるものと共通している。このような語り分けに、物語の場面場面における語り手の語る対象への態度を見ることができる。

語り手と Capote との関係について、もう少し考えてみたい。ある日曜日、家族が教会に行き留守の間に、Mr. C のところへ Miss Bobbit が訪ねてくる。一人家にいた Mr. C に、彼女は次のように語る。

I've had enough experience to know that there is a God and that there is a Devil. But the way to tame the Devil is not to go down there to church and listen to what a sinful mean fool he is. No, love the Devil like you do Jesus: because he is a powerful man, and will do you a good turn if he knows you trust him. (127)

悪魔を信頼し、愛そうという驚くべき発言に対して、淡々と Miss Bobbit の発言を読者に伝えるだけで、Mr. C は何も語らない。これはどうしてだろうか。家族全員が教会に行っているのに一人家にいるという彼の行動と、Miss Bobbit の発言と関連づけて考えてみよう。

Capote は *Music for Chameleons* の最後で、自問自答の形で次のように述べている。

TC: . . . Do you believe in God? And you skipped right by it. . . . It's the fact that you don't come right out and say that you *do* believe in God. I've heard you, cool as a cucumber, confess things that would make a baboon blush blue, and yet you won't admit that you believe in God. . . .

TC: It's not simple. I did believe in God. And then I didn't. . . . She [old Cousin Sook] told us the Lord had arranged for them to live there just as He had arranged for everything we saw. The good and bad. The ants and the mosquitoes and rattlesnakes. . . . And we believed her.

But then things happened to spoil that faith. First it was church and itching all over listening to some ignorant redneck preacher shoot his mouth off; then it was all those boarding schools and going to chapel every damn morning. (259)

このような Capote の神や教会への態度は、教会へは行かず一人で留守番をしている語り手 Mr. C に明らかに反映されている。その Mr. C の考え方を具体的に語っているのが Miss Bobbit ということになる。であれば、Miss Bobbit の言説について Mr. C はそのまま彼女の言葉を繰り返すだけでいいのであって、彼女の発言にコメントする必要はない。

Mr. C と Capote の類似性については次の場面からも推察できる。仲違いをした Bob に Preacher がクリスマスに本をプレゼントするが、その本の見返しには“Friends Like Ivy On The Wall Must Fall” (129) という言葉が書かれており Bob が激しく落ち込む様子が語られている。これもまた、子ども時代の郷愁に基づく感情であるといえるだろうが、この Preacher が書いた言葉は、Capote が New York 時代に好きだった少年から贈られた詩集に書いてあった献詞、“Like ivy on the wall, love must fall” (Clarke 64) を模したものである。その時の気持ちを Capote は、“That tore me apart, and I cried, because I really did love him” (Clarke 64) と、Bob 同様ひどく傷ついたことを告白している。

以上見てきたように、語り手 Mr. C の語りには Capote の心情、ものの見方が色濃く投影されているとあっていいだろう。これを踏まえて今一度、Miss Bobbit、Mr. C、Capote、Lillie Mae の四者が作品の中でどのように結びつくのか見ていこう。

V

Psychobiography という方法で Capote 作品を論じた William T. Schultz は、Capote の作品には幼少期の体験が心理的に大きな影響を与えていると論じている。Schultz は、Capote が繰り返し語る幼児期に母親に捨てられたという体験と、幼児期の IQ の高さや物を書くことへの執着に注目する。Capote は母親の愛情を求め続けるが、その願いは一時的に叶っても結局それは永続せず、そのたびに彼は疎外感に襲われていた。同様のことが、彼が大人になって

からも繰り返される。その繰り返しによって傷つけられた Capote は、心理的自己防衛として、求めても手に入らないものを無視する、あるいはそれを破壊しようとする行動に出る傾向があると分析する。彼にはその傾向が幼少期から終生見られた。この考察を基に Schultz は晩年の未完作 *Answered Prayers* を分析し、愛情の対象者を深く愛するが故に、友人である彼ら／彼女らから捨てられることを恐れ、先に相手を破壊してしまった作品と結論づけている。以下、この Schultz の分析を本作品に援用して考えてみたい。

先に見たように、Miss Bobbit と Lillie Mae Nina には New York での成功という大きな夢があった。しかし New York で理想の生活を得たにもかかわらず、義父 Joe Capote の語るところでは、Truman がホモセクシャルであることを気に病み続けた Nina はアル中になる。彼女は Truman を庇護し、愛情を降り注ぐような態度を取る一方で、憎しみ、さげすむような態度を取る。母親の愛は一時的には手に入るが、入った途端にまた失われてしまうという幼少期と同じことがここでも繰り返されることになる。

その結果、Capote は大きなジレンマを抱え込む。Bob と Preacher の関係について Mr. C は、“you can’t hate so much unless you love, too” (129) と語っているが、本当に Nina が Capote を嫌っていれば、彼は Nina を同じように嫌い、捨て去ることができただろう。しかし、実際には、時折愛情を示す Nina を Capote は捨て切ることができない。彼にとって叶ったはずの母親との同居が、逆に彼を今まで以上に苦しめることになったのである。

以上のような背景に基づいて Miss Bobbit と Lillie Mae Nina の類似性に鑑みると、Mr. C の Miss Bobbit への冒頭の態度、悲劇を強調しない語りには、彼女の New York 行きがもたらす幸福よりも、それがもたらすであろう

不幸の大きさを先取りして見ている様子がうかがえる。Capote や Nina にとって、叶えられた祈りは、けっして望んでいた結末を二人にもたらさなかったからだ。彼が後の作品のタイトルとする“answered prayers”は、“More tears are shed over answered prayers than unanswered ones”という St. Teresa of Avila の言葉とされる金言に由来するとされるが (Garson 168)、まさにこの言葉通りのことが Capote や Nina には起こっていたのである。Miss Bobbit が小説の最後で New York に旅立つ前に亡くなることは、Capote にとって、自分の、また母親 Lillie Mae Nina の分身でもある Miss Bobbit が遭遇するであろう不幸をあらかじめ無くしてしまおうという気持ちの表れとはいえないだろうか。この結末を Schultz のいう、求めても手に入らないものを無視する、破壊するという Capote の行動の一つのバリエーションと考えれば、わずか10歳である Miss Bobbit が New York で無くしてしまうであろう innocence をあらかじめ無きものにしてしまおうとする語り手の意志を、そこに読み取ることは可能だろう。

結 論

Paul Levine が “Miss Bobbit impresses as a fantastic mixture of innocence and experience, morality and pragmatism” (Waldmeir 83) と述べるように、Miss Bobbit は無垢と経験を具現化した存在である。大人ぶった振る舞いをし、大人を喜ばせるようなダンスをする一方で、偽のコンテストで簡単に騙されてしまうという点では、まだほんの子どもにすぎない。彼女が望んだ、誕生日の子どもたちのように踊り続けられる場所は、残念ながら現実

には存在しない。彼女はそのことに気づかないほど、まだ innocence な存在ともいえるだろう。それは、望み続けた安住の場を現実の世界の中に見出せない Capote の姿と重なる。母親 Lillie Mae と Capote がともに望み、叶えられた New York の生活も二人にとって心休まる場にはならなかった。こうした現実を体験した Capote が、innocence を身にまとい、一心不乱に自分の夢を追いかける Miss Bobbit の姿に、過去の自己を投影したとしても不思議ではない。それはまた Alabama で、たまに帰宅したとき息苦しくなるようなキスとともに自分を抱きしめてくれた優しい母の姿でもあった。叶えられた夢に多くの涙が流されるのであれば、そうならないようにしなければならない。Miss Bobbit の死は、傷つけられる前に、自らの手でその悲劇を取り去ってしまおうという Capote 自身の防衛機能が働いたからではないか。最後の場面で、“the rain began again, falling fine as sea spray and colored by a rainbow” (135) と虹がかかっているのは、彼女の死がけっして悲劇ではないことを表している。Garson が “At her death, her future remains both untouched and untarnished” (Garson 58) と述べるように、彼女の死は、10歳にふさわしい innocence を永遠に保つためだったからだ。

このように考えれば、Miss Bobbit の悲劇は、彼女の innocence を守りたいという Capote の防衛機能の表れであり、だからこそ彼にとっては悲劇に感じられなかったのである。それが語り手の冒頭のような語りにも反映したといえるだろう。

注

- 1 Capote 自身、自分の異質性、才能については自覚的で、それを強調するかのよう、*Music for Chameleons*の中で、“I’m an alcoholic. I’m a drug addict. I’m homosexual. I’m a genius” (261) という発言をしている。
- 2 Dill はいつも辞書を持ち歩いているが、“reading a Webster’s dictionary” (124) という Miss Bobbit の行動も、辞書を愛読していた幼き日の Capote を連想させる。
- 3 ここで述べた innocence は、Jan-Jacques Rousseau のいう「自然状態」に近い。Rousseau の innocence については、Peter Coveney, *The Image of Childhood* (Baltimore : Penguin Books, 1967)、拙論「*The Catcher in the Rye*における Innocence 喪失のプロセス」(『中・四国アメリカ文学研究』 第34号 pp. 35-43) 参照。
- 4 Miss Bobbit については、多くの批評家が *Breakfast* の主人公 Holly との結びつきを指摘している。彼女の名前 Lily Jane Bobbit が、Holly の本名 Lulamae や Capote の母親の Lillie Mae と類似している点からも、三人は同じ系譜にあるといえるだろう。Holly も、自分の安住の場を求め続ける女性である。
- 5 「夜のスタイル」、「昼のスタイル」について、Hassan は次のように述べている。

The nocturnal style of Truman Capote . . . makes
the greater use of uncanny trappings and surreal decors.

The sense of underlying dreadfulness compels the style to discover “the instant of petrified violence,” the revelation which only the moment of terror can yield. . . .

But if the supernatural defines the nocturnal mode of Capote, humor defines his daylight style. The style, evident in . . . “Children on Their Birthdays,” *The Grass Harp*, and *Breakfast at Tiffany’s*, assumes the chatty, first-person informality of anecdotes. (Hassan 231-233)

ここでいう “humor”、“the chatty, first-person informality of anecdotes” に該当するのが、Bob と Aunt El のバラをめぐる場面や Sister Rosalba の出てくる場面であろう。しかし、本文中で述べたように、この小説で語り手は、Hassan の指摘するような語りには終始しているわけではない。

引用文献

Capote, Truman. “Children on Their Birthdays.” *The Grass Harp and A Tree of Night*. New York: Signet Books, 1980.

—. *Music for Chameleons*. New York: Vintage Books, 1980.

Clarke, Gerald. *Capote: A Biography*. New York: Ballantine Books, 1988.

Garson, Helen S. *Truman Capote*. New York: Fredrick Ungar Publishing, 1980.

- . “Those Were the Lovely Years.” *Truman Capote*. Ed. H. Bloom. Philadelphia: Chelsea House, 2003.
- Hassan, Ihab. *Radical Innocence: Studies in the Contemporary American Novel*. Princeton: Princeton UP, 1961.
- Lee, Harper. *To Kill a Mockingbird*. New York: Warner, 1982.
- Levin, Paul. “Truman Capote: The Revelation of the Broken Image.” *The Critical Response to Truman Capote*. Ed. J. J. Waldmeir and J. C. Waldmeir. Westport: Greenwood Press, 1999.
- Moates, Marianne M. *Truman Capote's Southern Years*. Tuscaloosa: The University of Alabama Press, 1996.
- Nance, William L. “Variations on a Dream: Katherine Anne Porter and Truman Capote.” *The Critical Response to Truman Capote*. Ed. J. J. Waldmeir and J. C. Waldmeir. Westport: Greenwood Press, 1999.
- Prince, Gerald. *Narratology: The Form and Functioning of Narrative*. New York: Mouton, 1982. (『物語論の位相』遠藤健一訳 東京：松柏社)
- Schultz, William Todd. *Tiny Terror: Why Truman Capote (Almost) Wrote Answered Prayers*. New York: Oxford UP, 2011.